

# 「よい」文法記述について考える

—分類・周辺・例外・理論といかに向き合うか—



質疑応答用  
QRコード

## 【発表構成】

司会者……………三好伸芳（武蔵野大学）

発表者……………阿久澤弘陽（京都大学）、大江元貴（青山学院大学）、鈴木彩香（千葉大学）、  
井戸美里（国立国語研究所）

指定討論者…井原駿（津田塾大学）

趣旨説明（三好伸芳）……………	5分
発表 [1]：分類といかに向き合うか（阿久澤弘陽）……………	15分
発表 [2]：周辺といかに向き合うか（大江元貴）……………	15分
発表 [3]：例外といかに向き合うか（鈴木彩香）……………	15分
発表 [4]：理論といかに向き合うか（井戸美里）……………	15分
休憩……………	5分
指定討論者からの発議（井原駿）……………	15分
質疑応答……………	35分

## 1. パネルセッションの趣旨と背景

本セッションでは、「よい」文法記述」とはどのようなものかという点について、多くの文法研究者が直面するであろう研究上のタスクを取り上げながら、具体的な事例とともに議論することを目的とする。背景として、以下のような問題意識がある。

- (1) a. “よい”文法記述を実現するために必要な技術的な問題については、あまり議論される機会が少なく情報の集積も十分でない。
- b. 文法研究コミュニティにおける暗黙の了解を可視化し、建設的な議論や他分野との接触を活性化させたい。

→文法研究に際して頻出する問題やその対処法については、部分的に触れた論考が存在するものの（後述）、表立って議論されることは少ない。「よい」文法記述」について考えることは、研究者のすれ違いを解消し、より建設的な議論を可能にしてくれるだけでなく、これから文法研究を志す人にとって極めて有益な知見を提供することができる。

→今回は探索的な試みとして「言語直観を用いて現代日本語共通語の文法研究を実践している発表者（+理論的研究を実践している指定討論者）」という構成でパネルセッションを行うが、ぜひそのようなコミュニティの外側からの問題提起（歴史的研究、方言研究、理論的研究、自然言語処理、日本語教育などの立場からの批判）も期待したい。

“よい”文法記述を実践するためには、言語事実の分類や一般化、分析結果の新規性の検証など、さまざまな技術的問題が生じる。例えば田窪（1998：34）は、分類という作業に関連し以下のように述べている。

しかし、特定の語、構文を取りあげて、その用法を分類することが日本語という一言語の特徴、ひいては、言語そのものの特徴の解明にどのような寄与をするのかは、あまり明らかではない。その語、その構文の用法の分類は、説明されるべき現象の提示であり、説明の対象を構成するだけである。それらの形式がなぜ複数の振る舞いをするのか、複数の形式がなぜ重なり合う分布をするのかを、分類に使った基準より少ない数の基準で説明するか、あるいは、別のすでに一般的になっている基準から導出するか、ができなければ一般化とはならない。（田窪 1998：34）

- ただ分類を行うだけでは、むやみに概念装置を増やして記述を複雑化させてしまうという可能性がある。つまり、“よい”分類とは、「分類基準や概念装置を最小限に抑えつつ、より多くの言語事実の振る舞いを説明できるもの」であるということになる。
- 一方、田窪（1998）の指摘は『国語学』展望号において多くの論考を取り上げるなかで部分的に分類についての留意点を述べたものであり、研究の技術的問題そのものが議論の俎上に載せられているわけではない。

また、小柳（2020：72）は歴史的研究の論文の書き方について解説しているが、現代語の文法記述と通底する論点も指摘されており、論文の評価を左右する観点として「(1) 内容の新規性」と「(2) 問題の重要性」を挙げている。

(1)（引用者注：「内容の新規性」のこと）は不可欠です。すでに言われていることから出なければ、論文を発表する理由がありません。（小柳 2020：72）

また、(2)（引用者注：「問題の重要性」のこと）は(1)とも密接に関係します。内容に新規性があっても重要な問題を取り上げていなければ、学術的な価値は低いと言わざるをえないからです。（同：72）

- 学術的研究である以上は、新規性が求められることは当然のことである。加えて、新規のことがらであっても、暗黙のうちに自明のものと了解されている（通説に対するインパクトが弱い）論考は、それほど重要ではないということになる。
- 小柳（2020）の指摘は学会誌のチュートリアル企画という文脈でなされているものであり、論文を執筆するうえでの有益な解説が多くなされているが、「何をもって重要と見なすのか」などの踏み込んだ議論はない。

## 2. 「“よい”文法記述」のための観点

上記のほかにも文法記述の技術的な問題について扱った論考は散発的に見られるが<sup>1</sup>、例えば比較言語学の分野において仮説を評価する観点に一定の基準があるのに比べ<sup>2</sup>、文法記述においては議論の余地が多く残されていると思われる。そこで本パネルセッションでは、少なくとも次のような観点が「“よい”文法記述」を実践する際に重要になると考え、各パネリストがそれぞれの研究事例を題材として発表を行う。

- (2) a. **正確性**…言語事実を正確に一般化することができるか。
- b. **経済性**…より少ない概念や単純な規則のもとで、広範な言語事実を説明できるか。
- c. **明瞭性**…提示されている概念や規則が客観的で明示的なものになっているか。
- d. **新規性**…既出の知見や自明の事柄ではなく、新しい事実を捉えられているか。

→これらの観点到十分配慮すれば「“よい”文法記述」が実現することはある意味で当然と言える（もちろん、これらの観点が全てというわけではない）。しかし、各観点の緊張関係によって両立が難しい場合もあり、完全に実現することは必ずしも容易ではない。

以下、各観点の簡単な説明とともに、どのような場合に各観点对立が生じるのかを、助詞「は」を例に概観していく（併せて、対応する論点を持つ発表を紹介する）。助詞「は」には、周知のように「主題／対比」という2つの用法があることが指摘されている。

- (3) a. 太郎は学生です。 (主題)
- b. 嘘は言えない。(本当のことしか話せない。) (対比)
- (4) a. 太郎 {??は/が} 学生であることは秘密だ。
- b. 嘘 {は/が} 言えない私だが、本当のことなら話せる。

→「は」に「主題／対比」という2つの用法を認めることは、母語話者の直観だけでなく、(4)のような連体修飾節における現れ方という別の事実を説明するという点でも、一定の妥当性を有しているように思われる。つまり、「は」を2つの用法に分類するのは、より言語事実を正確に捉えているという点で**正確性**という観点到沿った記述と言える。

<sup>1</sup> 森山 (2010) が文法記述の過程を具体的に説明しているほか (ただし、やはり分類や一般化などにおける技術的問題に対する言及は少ない)、山泉 (2019) は研究コミュニティが抱えるバイアスとそれが言語分析に与える影響について論じている。

<sup>2</sup> 平子他 (2024 : 46) は比較言語学について概説する中で、祖語の再建は「自然性 (naturalness)、経済性 (economy)、一般性 (generality)」という3つの観点から評価されるという明瞭な基準を示している。音韻変化は身体的・生理的な制約を受けやすいという違いはあるが、「技術的論点と評価の基準に一定の合意がある」という点は、議論の透明性という点で極めて重要であると考えられる。

一方で、分類を立てるということは必然的に説明すべき概念が増えるということを意味し（阿久澤発表）、以下のような論点が生じうる。

- (5) a. 「は」の意味はあくまでも一元的なものに帰着させることが可能であり、「主題／対比」は個別の文脈における解釈の差でしかないのではないか。
- b. 「主題／対比」を標示する形態は必ずしも言語普遍的なものとは言えないため、より一般的と思われる概念（「旧情報／新情報」など）に還元できるのではないか。

→上記のいずれかの分析を採用した場合、より少ない概念で「は」を記述できるかもしれないので〈経済性〉の観点からは好ましい。一方、〈経済性〉の追求によって過度に記述が抽象化する可能性（鈴木発表）や日本語研究とは別の文脈で生じた理論的な概念の援用によって二次的な論点が生じる可能性（井戸発表）も考慮すべきである。

→このように、しばしば分類という操作においては〈正確性〉が〈経済性〉と（あるいは、後述する〈明瞭性〉とも）対立することがある。

さらに、「は」についてより詳細な言語事実を明らかにするために、以下のようなあまり典型的とは言えない事例を検討し、「話題(aboutness)」のような分類を新たに立てたとする。

- (6) a. あの形は雲が綿アメみたいです。
- b. 刺身はマグロだ。

→このような周辺事例は十分に分析が行き届いていないことが多いので新たな事実を発見しやすく、〈新規性〉の観点と親和性が高い（場合によっては分類概念そのものが〈新規性〉を持つ）。しかし、このような周辺事例を分析するための概念はしばしば臨時的なものになりやすく、誰でも参照できるような〈明瞭性〉（「主題」との違いは何か、どのように区別されるのか、など）を慎重に検討する必要が生じる（大江発表）。

→上記の事例は、用法の違いを正確に捉えようとしつつ分類概念を増やしている点で、前述の〈正確性〉、〈経済性〉とも密接に関連している。本パネルセッションでは、上記のような課題を踏まえたうえで「“よい”文法記述」を実践するための方法を考えていきたい。

#### 【付記】

本研究はJSPS 科研費 23K12174 の助成を受けた成果である。

#### 【参考文献】

●小柳智一（2020）「歴史研究の論文」『日本語文法』20-1, pp. 71-78. / ●田窪行則（1998）「文法（理論・現代）」『国語学』193, pp. 31-38. / ●平子達也・五十嵐陽介・トマペラル（2024）『日本語・琉球諸語による歴史比較言語学』岩波書店. / ●森山卓郎（2010）「文法記述の舞台裏」『日本語学』29-2, pp. 14-20. / ●山泉実（2019）「言語学の理論的研究を阻害する諸バイアス」『日本語・日本文化研究』29, pp. 44-72, 大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻.